

精神エネルギー 1987年 旺文社

政木 和三(まさき かずみ)

大阪帝国大学航空学科の研究室に入る。

通信工学科、精密工学科を経て、工学部工作センター長。

現在、林原生物化学研究所参与。工学博士。太平洋戦争中は新兵器の研究のため戦時研究員となる。インスピレーションにより、800件余の発明をなす。

物質はサイクルしている

地球上に植物、動物が棲息するようになってから数億年間の長い間にわたり、公害は発生していない。

ところが人間が科学文明を得たわずかな100年の間に地球は非常に汚染され、このまま進めば数十年を経ずして動植物が生存困難な状態となるのではないだろうか。

科学力の少なかった100年前までは、地球上のすべての物質が輪廻転生するように循環していた。

たとえば燃料について考えてみても、昔は、山へ薪とりに行ったおとぎ話のおじいさんのように、山から木を切り出してそれを燃やしていた。木は燃えることによって炭素と水素と酸素になり、水素と酸素は水となり、炭素は地上に戻って輪廻(サイクル)していた。それが現在はサイクルしない燃料、石油の使用によって、種々の汚染物質を空気中に放出している。肥料にしても昔はわれわれ人間をふくむ動物の糞尿を畑に撒布し、それを栄養として食糧品が生産され、それを動物たちが食としてまた糞尿を作る。

このように循環していたために、自然界はバランスを保ち続けてきた。

それが50年ぐらい前から化学肥料の生産、25年ぐらい前からは合成洗剤の開発によって、国民のすべてが汚染に協力することになった。

洗濯も、昔(と言っても昭和27年以前)は、天然の動植物油を材料とした石鹼が用いられていたが、昭和28年前から石油を材料とした合成洗剤が市販され、現在はほとんどこれが使用されている。

石鹼のカスは自然のサイクルの中で除去されるが、合成洗剤のカスは下水に流したあと、分解されないまま川や海へ注ぎ込まれる。そしてリン酸は未分解のまま毎年十数万トンも沿岸の海中に流入するために、水が富栄養状態となり、動植物プランクトンが異常に発生して、海はたちまち酸欠状態となり、魚を殺すことになる。

下水処理を行なっても、洗剤中の主成分を完全に分解することは不可能であり、特にリン酸塩は二次、三次の処理を要して大変な費用がかかる。海水に流れ込んだ合成洗剤は、魚類の体内に入り、それを食糧とした人間になんらかの害があっても当然のことであろう。

今こそ、合成洗剤の製造および使用を、考え直す必要があるのではないだろうか。

自動車にしろ、合成洗剤にしろ、一般社会人の悪意なき行為が、そのまま人類および地球上の生物を滅亡させる方向に動いているのである。

世の指導者は、まず科学技術の開発において、公害をもたらすものを規制し、どれほど便利でも、利用価値が高くても、生物の存続を危うくするよなものはすべて廃止すべきである。

私たちの子供のころは、どこの海においても水浴びと潮干狩りが楽しめた。50年前の海を知っているものにとって、現在の海とは何であろうか。心なき人々の悪意なき行為によって、汚れきってしまった以外の何ものでもない。

地球上に生物が出現して以来30数億年間は、天然の法則に従って、すべてが輪廻転生してきた。生命を持ったものが死んだ後は、それが元の地へ還り、そして、つぎの新しい生命の源となる。空気中の炭酸ガスも、植物の同化作用で酸素として生まれ変わり、動物はそれを生命の源として生きてきた。

空気、水、そして地球上の物質は、輪廻転生の形によって、グルグルと循環していくまでも無限の生命を保ってきた。

人間も肉体は50年または80年間の使用により老衰となって死亡し、土に戻り消滅してゆくが、肉体を支配した生命体は、未来永劫に生き残り、つぎの肉体に宿るものと考えられる。

もしも、生きている間だけが人間の全部であれば、精神修養とか、善行を積む必要はないのではないか。死後の自分、そして来世の自分のために、現世の修行が必要なのではないか。

物質の輪廻転生と同じく、人間の生命体も輪廻転生してゆくものと考えたとき、つぎの自分が数百年後に地球に生まれたとき、自分の住む地球を確保するためにも、自分の手によって地球の汚染をくいとめなくてはならないのである。

バクトロンの仮説

私たちの世界は、原子の集合により構成されているが、原子も核と電子によって構成されている。核と電子軌道のすき間にバクトロン(極超微粒子)が存在し、核と電子間の引力の伝達の役目をしているのではないかと私は考えている。バクトロンの質量は電子の質量の数億分の一の小さいものと思われる。

バクトロンと電子の大きさの関係を具体的に示すと、ちょうど、飛行塔で綱の先に吊り下げられて回っている飛行機が電子であって、その周辺にある空気がバクトロンだと思えば、大きさの比較が想像できると思う。原子核の場合には陽子と電子を結ぶ綱はないが、たがいの引力がバクトロンを通して作用するために、一定の距離で安全が保たれている。

われわれは、真空は何もないところだと思っているが、実は宇宙の真空の場所にもすべてバクトロンが充満しており、光や電磁波や重力波は、このバクトロンによって伝播されると私は考える。これらは波動であるために、その波が伝わるための媒体が必要である。その媒体がバクトロンである。

先年、米国で重力波の伝播実験が行なわれた。重力すなわち引力も一種の波動であるとすれば、それを伝播する媒質がなければ伝えることもできない。つまり、引力を伝える媒質として、バクトロンが必要となってくる。

しかし、現代の科学においては、まだバクトロンの存在が認められていないため、つぎのような不合理が起きている。

たとえば、光の速度は1秒間約30万kmとなっている。これは真空中の光の速度であり、この真空とは、物質が皆無の真空状態と考えられているが、バクトロンが存在して光を伝えていると考えても差支えはない。もし、バクトロンのない完全真空の中で光を発射すると、その速度は無限大になるか、あるいは全然通らないことになるかもしれない。

バクトロンの中を、波を持った光粒子が通るため、光速が一定の値を持つことになる。空気の中を音波が毎秒340m進むように、媒質によって定まる速度が光速となる。

引力の伝播速度も、光速と同じだと思われ、引力もバクトロンを媒体として、重力波が伝わるものであって、引力を伝える物質がなければ、重力も発生しないだろうと思われる。

つぎに、現在の大宇宙はものすごい速さで膨張しているもの信じられているが、

これは星雲から発生する光の中に地球上にないスペクトルがあるところから、星雲が後退しているために、ドップラー効果によって、波長が長くなったものと説明されている。しかし、これはひとつの考え方であって、別の考え方をすれば、星雲は定位置で動かないが、星雲を発した光粒子が、バクトロンの中を何千万年か何億年間も通ってくる間に、仕事をするために、エネルギーを消費し、振動数が変化したと考えても不合理ではないはずである。

近い将来、光子ロケットが完成して、その速度も光速に近づけることが可能となる。それに乗って、千光年の星まで飛んでゆくと、往復二千光年かかるが、地球で待っている人にとっては二千光年であるにもかかわらず、光子ロケットに乗っている人にとっては数年に過ぎないといわれる。これはアインシュタインの相対性理論による考え方であって、疑問に感ずるところがある。この考え方には、光速と時間が完全にひとつのものであるという仮定のための不合理であると思われる。

全宇宙に分布しているバクトロンの密度は一様でなく、場所によって異なっていると思われる。密度の差によって光速が変化するため、光は屈折を起こす。そのためには、光は直進するとはいききれなくなり、宇宙の中心をはずれると、密度によって光は内側に曲がるため、自分の前から出た光が直進すると、自分の背に返ってくるような不思議な現象が起きることであろう。

このような現象によって、平行線も無限のかなたでは交わってしまうことになる。

光の速度が常に一定でないという現象は、私たちの身近にも多く見受けられる。真空中と空気中で少し違っているが、ガラスの中では光の速度は3割から5割も遅くなっている。これは光の屈折率と光速の関係から周知のことである。

このように、光の速度は場所によって大きな差があるが、時間はどのような場所でも必ず一様に過ぎてゆく。地球の一時間と、アンドロメダ星雲の一時間は同じであり、全宇宙の時間は同時に同じように過ぎてゆくものであるから、光の速度と時間は全然別のものであると考えるべきではないだろうか。

念力現象もバクトロンによって説明される。つまり、原子間の結合力は、バクトロンという引力を伝える媒体によってできているとすれば、このバクトロンを、物質、たとえば金属の中から取り去ると、原子間の結合力はなくなり、金属はバラバラに崩壊してしまうわけである。

金属内のバクトロンを追い出す方法としては、精神波を注入することが考えられる。

精神波は、一種の波動性を持つ粒子であって、その波長は、レントゲン線の最短の波長の百万分の1ぐらいのものである。これは、エレクトロンの自由振動周波数の10の15乗分の1以下となり、人工的に電気的に発生させることは不可能な周波数である。

この人間の精神波は、遠く離れた肉親に何か不幸があるとき、虫の知らせと称されている信号源となり、普通人の場合、生命に関するような重大時に自然に発生する。超常能力を持つ人は、自分の意志によって、これを自由に使用することができるものである。

精神波は、光に似た波動性の粒子と考えられるが、光粒子に比べて、質量は非常に少なく、数万分の1、またはそれ以下の小さいものと思われる。

精神波の伝播速度は、光に比べて比較にならないほど早く、数万光年の距離を1秒以内に到達することができる。

しかし、バクトロンに比べると、相当大きい質量を持っており、金属内とか物質内に精神波を注入すれば、その量だけ、バクトロンは押し出されて稀薄となる。バクトロンが稀薄となれば、原子間の結合引力が弱くなり、物質はやわらかくなる。念力によって金属が曲がることも、これによって説明できる部分もある。

とはいえ、超常現象は、この物理的現象以外に時間を異にした高次元の世界のことを考えないと、ほんとうの理解はできないものである。

バクトロンが重力を伝るものであれば、それを遮断する装置を作つて、円盤に取り付ければよいことになる。ところがここに大変むずかしい問題がある。前にも述べたよ

うにバクトロンの大きさは非常に小さく、電子や光子が通らない容器でも、バクトロンは平気で通り抜けてゆく。そこでバクトロンを通さないような物質を探さなければならない。

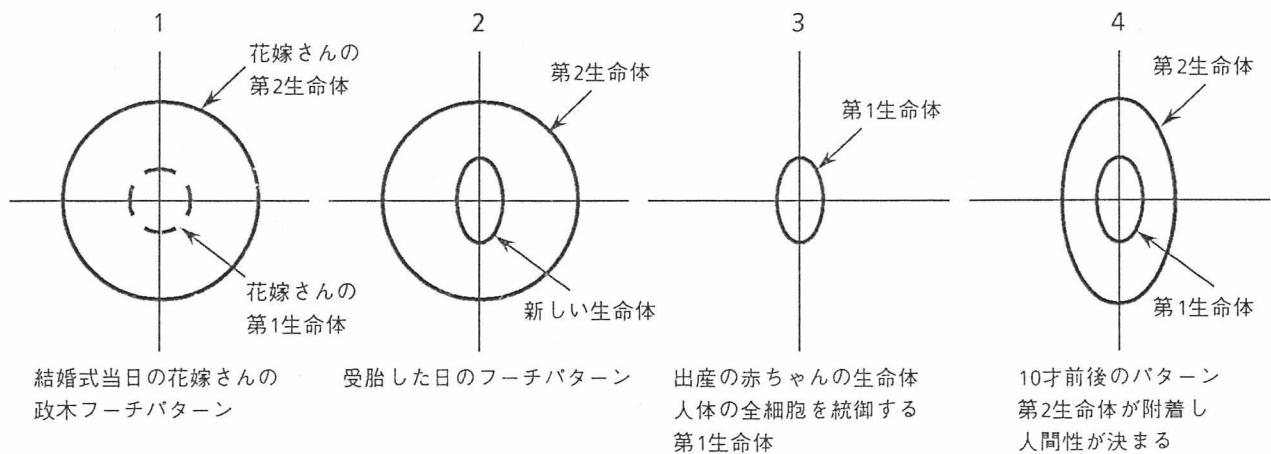
その物質が見つかれば、それで円盤の外側を作り、バクトロンを遮断することによって引力作用がおよばなくなり、無重力とすることができる。引力の働くかない物体は空に浮かぶことになる。動きたいときは、その方向に引力だけを通すように、引力取入口を開閉すると、上下にも、前後にも、自由に高速で動くことができるようになる。

人間は肉体と生命体の複合体

政木フーチパターンによって、ある新婚の花嫁さんを測定すると、結婚式当日には、図1のように理想的な女性のパターンが現われた。この円形の女性は自分を犠牲にしても、夫や子供のために尽くしてゆく最高の良妻賢母型である。しかし、新婚旅行から帰ったときには、図2のように体内に男の子の生命体のパターンが発生した。これは新しい生命体が、体内に宿っていることを示すものである。

そして十月十日過ぎて、出産した子供は玉のような男の子であった。妊娠したときに発生する生命体は、円形ならば、女性らしい女性か女性らしい男性であり、橢円形ならば男らしい男性か、男らしい女性である。生命体は性別ではなくその人間性を表わしている。出産したときは、母胎の中にあったときと同じ生命体のパターンであり、そのまま10歳から13歳ぐらいまではひとつの生命体のままである。(図3)

小学校の終わりから中学時代に、第二の生命体が付着する。そのパターンは図4のようになる。この男の子の将来は、包容力を持ち中庸な判断力があり、敵を作ることなく、すべての人と仲よくやってゆける管理職に最適な人間となることを約束されている。



人間は第一生命体のみの場合は、ただ男の子または女の子だけを示し、まだはっきりした性格を持たないが、第二生命体が付着したときから人格が固定し、個人差がはっきりとしてくる。この第二生命体の付着によって、その人間の一生が運命づけられてしまうが、それがどのようなカラクリによって定まるのかは、よくわからない。本人の気の持ち方、環境、そして友人等によって変わるものらしいが、要は本人の精神状態によるものらしい。

この第一生命体は、生命のあるものすべてが持っているらしく、人間と動物の違いは、第二生命体の有無によると思われる。

犬や猫等を政木フーチパターンで測定してみると、第二生命体は存在しないことがわかる。人間はそれぞれ各々の個性の違いが大きいが、一般の動物には大差のない原因かとも思われる。

第一生命体は、心肺肝脾腎胃腸等、五臓六腑の調和を保つためのもので、人間が生きるために絶対的に必要な生命体である。

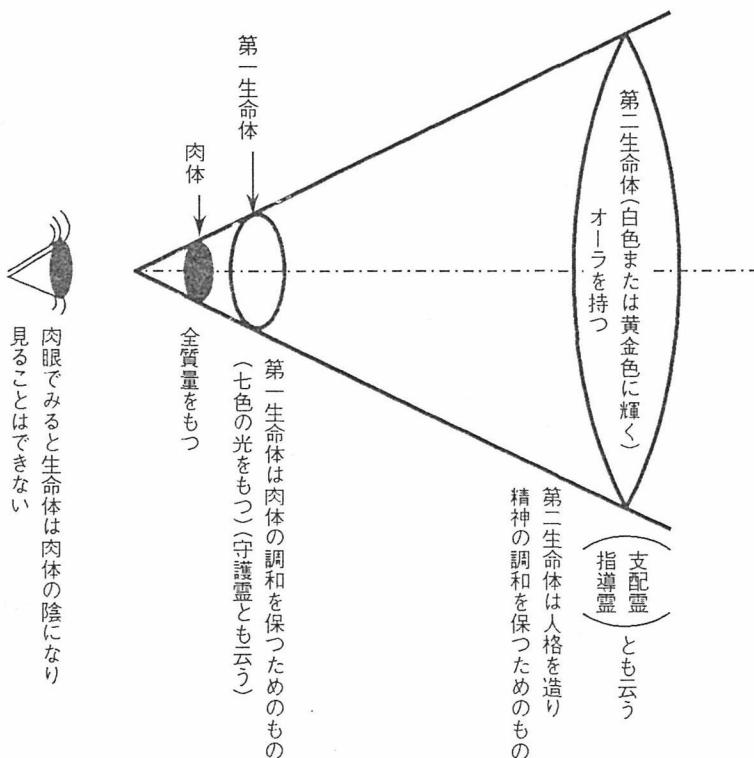
つぎの第二生命体は、人格、人間性を形成するための生命体で、管理職タイプ、エンジニアタイプ、特技タイプ、そして強情な人等が、これによって決まる。

第一生命体は一生これを変えることはできないが、第二生命体は、自分の修行、努力によって、自由に入れ替えることができる。これは、政木フーチパターンで測定することによって容易に確かめることができる。

また、オーラ(靈光)の見える人によれば、第一生命体は、7つの色彩で観察されるそうで、PS学会のK医師は、元病院長であったが、普通の診断よりも、オーラによる診察のほうが正確であることを知り、病院長を他人に任せ、精神による治療にふみきった有徳の師である。

このK医師の言によれば、第一生命体の色によって、その人の病気が瞬間にわかるそうで、第二生命体は、白色か金色に、まぶしいほど明るく輝いているという。

このようにして、政木フーチパターンによって表示される第一生命体と第二生命体は、オーラによって識別することができるものである。



このオーラは、練習によりすべての人が見ることができるものである。自分の手を机の下に入れ、机の下を暗い状態にして、指先の少し先に眼のピントを合わせるようにして見つめていると、指先から白いボヤーッとしたモヤのような光が出ていることがわかる。これが生命体のオーラである。

第一生命体も、第二生命体も無限の時間を生き続けるものらしく、現在の肉体が滅びれば、数百年後につぎの肉体を求めて移り住むことは、T.S先生の前世供養により、それがはっきりと証拠づけられている。

もしも、人間が肉体のある間だけがすべてであれば、生きているときに善行を積む必要もなく、気ままにしたい放題に一生を送ればよい。しかし、人はなぜ修行をし、社会のために尽くすのだろうか。それは、肉体は70年から90年で滅んでしまっても、未来永劫に残る生命体が、肉体を持つ時間内に積んだ徳によってつぎの肉体を持つとき、さらに高度な一生を送るための基礎となるためである。

発明と奇跡

発明をする人は数種から数十種もの新製品を作り出すことができるが、発明をしない人は一生かかっても何ひとつできない。

現在の大会社の社長、会長は、前世においても城主であり、国王であったように、何回輪廻転生しても一国一城の主となっている。ただ、その前世において、他人に幸福を与えたか否かによって、現世の地位が決まっているようである。いつも管理者として生まれ出る人、また、発明者となる人、これらは神の定めた職業かもしれない。

発明者も超能力者も、その能力は、自分の肉体が持つ教養を基本として展開してゆく。たとえば、1の教養を持つ超能力者がその百倍の力を出すことができるとすれば、若いころに多くの修行と研鑽によって百の教養を持つとすれば、その百倍の能力として1万の力を発揮することになることになる。

自分に不思議な力があると思う人々は、他の一般人よりも、より多くの教養を身につけることによって、社会により大きく貢献することが可能となる。

スプーン曲げブームのとき、ある少年は勉強しなくても漢字が自然に書けたり、算数の運算が間違っていても答だけが合うのを得意としていたが、その少年に、「君はその力を最高に発揮するために、友人よりもよけいに勉強しなさい。そうすれば、その勉強した力は、友だちは一対一の力だが、君はその百倍、千倍の力となるから」と言ったことがあった。

生まれつき天才という人はほとんどいない。それは人知れずになした努力の結晶である。昔から、天才の99%は努力の結晶であるといわれている。発明王エジソンの場合も、少年時代、青年時代を通して、寝る時間をさいてまでした研究と実験が実ったものである。発明をするには、あらゆる現象に対して疑問を持つことが必要である。身の回りの日常茶飯事を、あたりまえのことだと思っている人に発明はできない。

1+1はなぜ2になるのかと質問し、先生を困らせたエジソンの話は有名である。科学は、発明発見によってのみ進歩するものであり、疑問を持たぬ研究者には進歩はあり得ないであろう。

疑問を持つとしても、はるかに偉大なもの求めのではなく、自分の身近な現象に目を止めればよい。たとえば雨の日に、滴が石に当たって飛び散る風景を見て、俳人のような気持ちで眺めるのもよいが、科学研究にたずさわる者は、その雨滴が石に衝突した瞬間を、十万分の1秒ぐらいの高速度カメラで撮影しているような感じで解明したいものである。

戦前、日本のトップピアニストのH氏が、当時新設されたデパートのエスカレーターのそばに立っていた。お弟子さんの1人が、上へ上がって行き、用事をすませて1時間後にそこに来ると、H先生は、まだエスカレーターのところに立っている。

先生は、「これは不思議だよ。階段があとからあとから、いくらでも出てくる」と、いったということである。

音楽を探究し、超一流となる人には、このような当然のことが不思議だと思えるものである。そこにつぎの新しいものが湧き出すのである。身の回りに起きる出来事を当然のことと思ってしまえば、それ以上進歩することはないが、当然のことにも疑問をいだくことが、発明発見のもとになるのである。

私は子供のころからどんなことでも不思議に思い、なぜだろう、不思議だな、と渾名されるくらいいつも不思議がっていた。発明をするには、あらゆることに疑問を持たねばならない。当たりまえのことでも不思議がる気持ちは40歳になっても、60歳になっても続いている。

(1) 宇宙の果ての真空の中はどんなだろうか?

- (2) 水に熱を加えたとき、熱は水の分子にどのような影響を与え、どのような部分が熱を感じるのだろう。水の分子間隔が変化するのか、H₂Oの電子と核の距離が変わらるのか？
- (3) 引力とか重力はどうして発生するのだろうか？
- (4) 原子はどこで作られたのだろうか？
- (5) 何もない世界には時間もないというが？
- (6) 光はどうして伝わるのだろうか？
光は、光粒子、または光波と考えられているが、もし粒子であればどんな形であろうか？
そして、回転で進行するのだろうか。また、速度はいつも一定だろうか？
磁力とは粒子か線か。そして媒体は何だろうか。そして生命とは関係あるのか？
- (7) 香りの本質は？ そして、その波長は？
- (8) 電流や光も、飽和現象を起こすのだろうか？
- (9) 人間の生命の本体は？
- (10) 時間はどうして経つのだろうか。時間は物質か波動か？

このようにいくらでも疑問が湧き出てくる。

むすび

科学的研究に生涯を費やしてきた私にとって、最近の5年間とそれ以前の50年間には考え方方に大きな差違がある。

前の50年間は科学を物質だけの現象とみてきたために、神の存在を完全に無視し、そのエネルギーもゼロとしてきた。その後の5年間は、絶対神の存在を身をもって知り、信ずることになったものの、神に対する依頼心は少しも持たずその力はゼロとしてきた。

しかし、前の50年間のゼロと、今の5年間のゼロとは根本的に異なり、前のゼロは何もないゼロであり、後のゼロは次元を超越したゼロである。それはフーチバターンでいう一次元の点と八次元の点と同じことである。

人は生まれ、そして必ず死ぬ。いかなる権力者といえども、これを避けて通ることは絶対にできない。この厳然たる死の事実を、生まれた瞬間から直視しなければならない。

人は死によって、すべてを失うものであろうか。死によって、すべてを失うとすれば、修行の価値も考え直さねばならない。

私は、自分の650年前の前世を、畠六郎左衛門時能と知った。そしてその人が実在であったことも、多くの史実によって明らかとなった。

しかし、それだけで、ほんとうに自分に前世があったという確信は持つことはできない。

幸いにして、私の周辺には、スプーン曲げから始まって、空中における絵や文字の発生、物体の転送と発生と消滅、そして真珠の発生とその成育の記録、心の迷いから脱却したときの大黒像の眼前における変身、そして観世音菩薩像の出現等が実際に起こった。これは夢ではない。それらの物体のすべてがわが家に実在する。

これら超常現象は、どれひとつとっても、現代の科学的な常識では、解明できない。

しかし、実在すれば事実である。事実とすれば、それは真実である。それが解明できないのは、人の力が不足してるためであろう。

この不可解な事実が、真実とすれば、誰も見たことのない前世があってもよいのではないだろうか？ どうせ人は死ぬ。どうしても死んでゆかねばならない運命であれば、その死をもまた楽しくすることが真の幸福ではないだろうか？

必ず訪れる死を楽しく迎えるためには、生を充実させねばならない。生きている間は誠心をもって、自分に恥じない行動をとり、ああ私のすべきことはすべて終わったと、大満足の中に大往生すべきである。

死とは肉体と生命体の完全分離である。肉体をなくした生命体は、修行することも向上することもできない。生命体が向上できるのは、肉体を持ったわずかの期間だけである。

すなわち、生きている間でないと生命体の向上、進歩はあり得ないものである。肉体を持てる期間は、永くても100年くらいのものである。天上界にいる生命体だけの時間は、500年から800年にもなる。

そして再び地上界へ生まれ出たときは、前世の償いを必ずしなくてはならない。

前世において充分に修行のできている人々は前世よりも高い位置へ昇り、前世において人を苦しめた人は、来世において苦しむことになる。仲の悪かった夫婦は、再び結婚してこんども仲よくしなければ、また次の世も仲の悪い夫婦とならねばならない。

これらは多くの記録によって克明に知ることができた。人間は輪廻転生して、必ずまた生まれ出すことを念頭において、すべての行動をとらねばならぬ。

眼前の欲望だけによって行動すれば、他の多くの人々が不幸になることがある。主義、主張もよいが、それは天地の真理に照らして、正しいものでなくてはならない。

私利、私権のための争いなど、勝って何になるのであろう。勝ったときにそのむなしさを本人が最大に知ることだろう。

人に喜びを与えたとき、自分の心に最高の幸いが無限に湧き出することであろう。